

子育てと夫婦の連携 (2)

子ども達のSOSのメッセージより

一 児童臨床家の立場から

(註1)

池田 秀子

はじめに

育児は人格形成に関わる大事業であると言われて
います。ですから『手塩にかける』という面が必要
かと思えます。手塩にかけるとは、自らで手を下
し骨を折ること」と辞典には記されています。

私は十数年教育相談や児童相談所の臨床の現場で
子どもの心の治療に携わって参りました。現場に於
ては、不登校やいじめの問題、家庭内暴力、盗みや

非行、チック、吃音、集団不適応等々の沢山のケー
スを経験します。いわゆる子どもの心の問題です。
心理学の立場から見ますと、人間の行動には必ずあ
る目的や意味があると言われています。子どもの問
題行動というものも、子どもが『自分らしく生きら
れなくなってきた』ことの、心のSOSのサインだ
と解釈されています。子どもから周囲に「助けて
!」「ちょっと苦しいヨ」という信号が送られて

いる訳です。そのSOSのサインが何を意味し、どうして欲しいのかを周りの大人達がキャッチ出来るか否かが、治療のポイントになります。治療とは、それを親と治療者とが協力して捜し出す作業なのです。治療体験からは、子どもの問題行動の大部分は乳幼児期にその原因となる核が見出されます。それも、乳幼児期の母子関係に起因しているものが多いのです。また仮に他の原因によるものであったとしても、現在のお母さんの対応が変化することで、その子どもが今の問題行動が収まっていく例を幾つも経験しました。そういう意味で、お母さんは子どもの心の『特効薬』と言えるのかも知れません。

こうした私の現場での治療体験をもとに、子ども達のSOSのメッセージを通して、子育てに於ける夫婦の連携の在り方を考えてみたいと思います。(予めお断りしておきますが、実例はそのままの原形ではありません。プライバシー等配慮し、ある程度の変更や抽象化を行っています)

(1) 母子一体感の基礎作り

乳幼児期にお母さんは無償の母性愛で子どもの心に“お母さん”という『心の基地』を作ってあげる事が、とても必要です。お母さんと子どもの間にはまず絶対的信頼関係のバイブを作ることです。この絶対的信頼関係を作る為には、お母さんは赤ちゃんの要求に百パーセント合わせてあげなくてはなりません。真の母性愛は、自分の事をすっかり忘れて子どもを“思いやる”ことだと言われていますが、その様な神々しい心は日常の忙しさの中で無縁になる時もあるかもしれませんが、その時にはお母さんは赤ちゃんの為に「我慢して堪えるんだ」と思って下さい。お母さんの都合に合わせてるのではなく、赤ちゃんに合わせて、しっかり可愛がって下さい。

“人見知り”という現象があります。(生後約八ヶ月頃)これは知らない人を見て赤ちゃんが泣くと言う現象ですが、これは赤ちゃん自身が自分にとって大切な人がわかったということで、育児上重

要なポイントとなります。どんなに泣いていても、お母さんが抱けば泣きやむ、つまり「お母さんが一番だ」と赤ちゃんから認められたことを示しています。ここに至るまでは、とにかくお母さんは赤ちゃんの要求を無条件にすべて受け入れ、母性愛で包みこんであげることが必要だと思えます。こうしてこの時期に母子間に、しっかりとした信頼のパイプを作り上げておくことが、後に人間への信頼感の基盤となり、人格形成上大切な原点となります。実際の相談例のうち、母子関係のパイプが欠落しているものが、大半を占めているという事実からもその事は明白と考えられます。

*

☆A君は小学校三年生の男児です。盗み行動が止まらず、叱つても叩いて聞かない子どもでした。A君は二歳年上の兄の下に生まれた男の子で、両親共々次は女の子を望んでいたのに、A君が生まれた時、お母さんは思わず「エッまた男！」と叫んでしまい、看護婦さんに叱ら

れたという事でした。お母さんは娘気分の抜けない華やかな雰囲気の人で、子育ては嫌いだったそうです。お母さんの実家の庭続きに住んでいたこともあり、お母さんがA君の面倒を見なくても誰彼となく周りの人間が世話をしてくれたようでしたが、A君にとって「特別な人」はいなかったようです。お母さんはA君に手を掛けることがなかったので、赤ちゃんの頃の記憶は殆どありません。A君には当然「人見知り」という現象も起こりませんでした。A君は幼児期、我儘で言うことを聞かず、お母さんとしては可愛く思えず、相性の悪い子だと思っていたそうです。お母さんと治療者との話し合いの中で、小さい時にお母さんがA君への愛情を与え損なった事にお母さん自身が気付き、その修復にその時点から努力するようになって、A君の行動は少しずつ快方に向かいました。

*

☆B君は、朝になると暴れて登校出来ない小学一年生です。その原因をたどってみると、B君の出生時にお母さんが病気になる、一年間入院生活を余儀なくされた

いうことがわかりました。たとえ事情があったとしても大切な時期に、母と子の信頼のバイブができなかったことには変わりなく、このケースの原因を作っていたのです。

*

このようなケースに出会うたびに、母と子の関係は何と重要なのだろうと考えさせられます。父親に関しては、一般的に乳児期の父親不在は、そのことが母親の感情を刺激し、母子関係を歪めない限り直接影響を与えるとは考えられないと言われています。^(注2)しかし、現代の若いお母さんにとっては、この時期に休みもなく、無条件で赤ちゃんを受け入れて、自分を抑えて育児をすることは難しいことかと思えます。お母さんがこの時期に良い育児ができる為には、夫であるお父さんがお母さんの精神面をしっかりサポートしてこそ、初めて成されるものだと思います。「大変だね。夜中に起こされて！ 良くやってくれてありがとう！」などと妻を労り、妻の大変

さをしっかり受け止めて、共に子どもの成長を喜び合うという妻への精神的サポート、という形で育児への参加が、この時期の父親には必要とされている、と考えます。

(2) 父と母二人三脚でしっかり眠をする

しつけには、「おはよう」「ありがとう」の挨拶から、規則正しい食事や睡眠の習慣、トイレでの排泄の習慣など色々あります。本来しつけとは、縫い目を正しくするために、予め仕付け糸で縫い押さえておくということからきている言葉なのですが、きちんとした人間になる為に予め親が教える道筋、と言ってもよいでしょう。子どもにとっては、乳児期のように、欲した時に自由に飲んだり、寝たり、いつでもおむつの中でおしっこが出来たりする方が楽で心地好みに違いありませんが、「大好きなお母さんが、トイレでおしっこをすると、おおりこうさんね」といって褒めてくれるから、「大好きなお父さ

んが「ダメだよ」というから我慢しよう」等と思っ
て、お父さんやお母さんのしつけに従うようになる
のです。大好きな人に褒められたという気持ちは
大切なことです。今度は子ども側が我慢する番に
なったわけです。こうして人間の社会生活に必要な
我慢する力や自制心を育てていくのですが、その根
底には「大好きなお母さんだから、大好きなお父さ
んだから」という愛情のベースが必要です。叱るこ
とが、しつけとは限りませんし、むしろ両親の模倣
が、しつけとなることが多いでしょう。怖いから従
うとか叩かれるからやらない、というのでは、本物
の心の成長には役立つ事が少ないと思います。「嚴
父慈母」という言葉があります。現代では子育てに
於ける父性は必ずしも父に、母性は必ずしも母にと
いうように堅く考える必要はないと思いますが、子
どもに正しいことを教えるためには、片方がしっか
り叱って教えたなら、片方の親は叱られてうち沈んで
いる子どもの気持ちをしっかり受けとめて、包んで

あげる役割分担が必要かと思えます。

*

☆C子ちゃんは、小学校一年生の夏頃から週に一、二
回しか登校しなくなりました。C子ちゃんは「子どもを
育てたい」という気持ちが全然沸いてこないお母さんの
子どもとして生まれました。赤ちゃんをどう扱って良い
か分からないお母さんでしたが、初孫だったので、おじ



いちゃんおばあちゃん叔母さん達が、可愛い可愛いと言って育てました。C子ちゃんは粹なく育てられたので、求めるままに何でも与えられ、叱られることも我慢することもありませんでした。そのうちに、C子ちゃんにとって、好きなことは楽なこと、嫌いなことは面倒くさいこと、になってしまいました。お父さんは、これではいけない、と感じたことがありますが、少しでも叱ると、叱られた経験のないC子ちゃんは、物凄く傷つくようで、叱ることもできなくなっていました。学校に入ると規則の連続です。とてもC子ちゃんは我慢が出来なくなりました。特に給食は何も食べられませんでした。嫌いな物が余りにも多かったのです。

*

この例は極端かもしれませんが、現代の、子どもを叱らない風潮と、又いわゆる「褒める教育」が正しく理解されずに行われることによって、我慢する心が育たないままに大きくなる子どもが時々います。物質面の豊かさや、兄弟数が少ないということも、

子ども達から我慢する心を養う機会を奪っているのかもしれない。

(3) 子ども一人一人をよく見つめる

子どもは心のSOSを「問題行動」で表現すると言われていますから、その時々の子どもの様子をよく見つめることが大切です。一方的に親の方針に合わせたり、他の子どもと比較したり、育児書の平均値に振り回されたりしないことが大切だと思えます。その子、その子の、成長のカーブがそれぞれにあるのです。気に掛かる行動が、その子に見出されたなら、その行動をすぐに叱ったりせず、まずその子をよく見つめて“どうして”そのような行動をとったのだろうかということを、考えてみるのが重要です。必ず子どもの欲求不満の原因である“何か”がその行動の裏側には隠されているはずですが、しかし、子ども自身、その欲求不満が何なのか自分自身では明確に解っていないことが多いよう

す。それは意識下の世界のことが多く、子ども自身も言語化する事は困難なことが多いからです。

*

☆D君は小学校一年生の男の子です。吃音がひどく、入学以来教室では一言も発言せず、夜中に怯えて泣き出すまでになりました。D君は大事な一人息子として両親に大切に育てられました。お母さんはキャリアウーマンでしたので、D君は0歳児から保育園育ちでした。お父さんは芸術家の自由業でしたので家にいる時間も多く、家事や育児も上手で、D君もお父さんが大好きでした。いつもお父さんと一緒のお父さん子でした。この両親には、理想の子育て論があり、D君を個性豊かに育てたいという願いが強く、D君が周りの子ども達と同じように振る舞ったり、D君に他の子と同じようなものを持たせたりすることは、特に嫌っていました。しかし本当はD君としては、友達と同じものが持ちたかったし、授業参観も本当は友達と同じようにお母さんに来てもらいたかったのです。でもD君はお母さんの都合や要望を察し

て、「いいよ！平気だよ！」と心を装って、両親の方針に同調してきたのです。この両親はよく議論する夫婦でもありました。議論ですから意見が合わない時もあるのですが、D君としては、その気配を不安に思い、何とか自分が両親の調節をしなればと子ども心に思い、ふざけて両親を笑わせたりして気を遣っていたのです。D君の問題行動はその様な心の無理がオーバーフローした結果でした。一年生のD君はお母さんへのラブコールをしていたのです。

*

また中学生の反抗期に見られる行動などは、よく検討してみると、社会や親への不条理に対する反発の表現であることが多く、「お父さんラブコール」のSOSの場合があります。

*

☆E君は、有名私立中学の二年生で、小さい時から成績優秀で良い子でした。突然中学二年の夏休みから学習意欲がなくなり、髪を赤く染め、注意をすると母親に暴

力を振るうようになりました。E君の行動は、親のレールに従って反発もせず良い子をやってきたそれまでの自分が急に嫌になり、自分の思った通りに生きたいんだ、という叫びでした。それは嫁姑関係を上手に生きている母（表裏を使い分けているようにE君には見えるようになった）の行動に対する反発がきっかけで起こった事でした。又それは、仕事の忙しさで家庭のことから逃げている仕事一筋の父に対する攻撃でもありました。お父さんがこのE君に真正面に向き合うようになり、E君の問題行動は解消の方向に向かいました。

*

この様に思春期の問題行動は、現代の弱体化した父性に対する抗議である場合が多いように思われます。社会的役割をしっかりと教えるのに、この時期の父親の役割は思うよりずっと大きく重要なのです。

（4）父性と母性の調和

小学校二年生のF子ちゃんは、学校から抜け出して家へ帰ってしまうことが続き、先生方を慌てさせました。小学校四年生のG君は、お母さんまで突然居なくなってしまうかもしれない、という不安感に襲われて学校へ行けなくなりました。F子ちゃんもG君の場合も、お父さんがある日、突然家から居なくなってしまった、という両親の離婚が原因だったのです。

幼児期に全く理由が分からず親が家から居なくなるとは、子どもにとって大変な喪失体験になるのです。また記憶には残っていない乳幼児期に、両親が離婚した場合でも、その頃の母親の心理が極めて不安定であった為に、母子の基本的安定感を確立することが出来ず、その後遺症が思春期のケースとして現れる例も幾つか経験しました。両親が離婚に至らないまでも、両親の「調和」が崩れた時に、子どもが問題行動を起こすという例は枚挙にいとまがない程です。優秀な小学校五年生のI子ちゃんの毎晩

の夜尿が、両親の“不調和”と、見せかけの家族団
樂のせいであった、という例もありました。

むすび

子育てには昔から、父と母、“両方”の関わりが
大切なことが謳われています。それは父と母、それ
ぞれの役割や関わりに“違い”があるからだと思います。
その違う“両方”が子どもへの心の発達には必
要なのです。私の臨床体験からは、乳幼児期の子育
ての「主役」はお母さん、子どもが「受ける役」、
お父さんは「見守る人」、そして思春期から青年期
の「主役」は子ども自身、お父さんが「受ける
役」、お母さんは「見守る人」であってほしい、と
提案します。しかし現代の日本では、社会に出て働
く女性も増え、仕事を続けているお母さんも多数い
ます。乳幼児期に培わなければならない母子の基本
的安定感を築くためには、社会的な育児休業制度の
充実が切に望まれますし、又、育児の大変さに苦慮

して不安な育児をしている若いお母さん達をサポート
してくれる社会的援助の制度なども望まれます。
そして、子ども達は常に父と母「両方」の balan
スのとれた愛情の下で育てられる事を切に望んでい
るように思われるのです。

(註1) 児童臨床というのは、問題行動のある子どもを
対象として、親に対してはカウンセリングを、子ども
に対しては、遊戯療法などの精神療法を行うことを言
う。

(註2) 小嶋謙四郎『母子関係と子どもの性格』

川島書店

《参考文献》

- 河合隼雄『家族関係を考える』講談社現代新書
新田慶『若い女性のための家族関係学』日本評論社